

新たな
連携へ

広域的連携

首都圏での学学連携セミナーの開催

キーワード：大学間連携・首都圏・交流拠点・研究活動

本事例の関係者

関西大学
社会連携部
事務部門
学内コーディネーター
関西学院大学
研究推進社会連携機構
事務部門
学内コーディネーター
文部科学省産学官連携
コーディネーター

関西大学と関西学院大学が共同で技術セミナー

【要約】

コーディネーターは、関西大学と関西学院大学が首都圏でのプレゼンスを高めるために、学学連携による技術セミナーを東京駅直結のサピアタワーで開催することを企画した。すでに、東大阪を中心とした関西圏の中小企業を対象に大阪府立大学と共同で学学連携による連続技術講座を開始して約2年が過ぎた。今回の連携の相手は、いろいろな分野で交流実績のある関西学院大学を選んだ。

技術セミナー開催の目的は、課題先進国である日本で両大学が連携することで高度化する社会の課題の解決に資することができるような、優れた情報を首都圏で発信することである。また、特徴を出すために次の点に留意した。

①社会的に関心の高いテーマを選定し、両大学が違った角度からの解決策を提示できないか検討する、②講師による一方的な講演ではなく、聴講者が議論に参加できるような環境をつくる、すなわちセミナーの前半は大学による研究成果の紹介、後半は参加企業の技術者との意見交換により、共同研究やプロジェクト研究の可能性を探る。

【きっかけ】

●首都圏における両大学のプレゼンスを高める

平成19年4月、関西大学と関西学院大学の東京オフィスが東京駅直結のサピアタワーの9階と10階に開設された。両大学とも産学官連携などの社会貢献活動にも積極的で、首都圏における大学の認知度を高めようとしていた。

当初から首都圏における関西大学の産学連携活動は、サピアタワー9階にある東京オフィスでの技術交流セミナーを中心に運営している。コーディネーターは、大阪府立大学との連携実績をもとに関西学院大学との学学連携による技術セミナーを企画した。

【段取り・ポイント】

●関西学院大学との開催打合せ

関西学院大学の産学官連携コーディネーターと開催する学学連携技術セミナーの特徴や目標、お互いのメリット、効果を何にするか、開催日時、テーマ名、担当教員などを決めるため複数回にわたり打ち合わせた。

【成果・結果や活動後の変化】

●十分な連携効果はまだ

第一回のアンケート結果を見ると、殆どはセミナーに満足という回答であるが、中には、連携の効果が不十分であるとの指摘があった。

●プレゼンス向上への期待

年に2回の開催を予定しているが、十分な準備の下に開催することで、首都圏における両大学の存在感を高めることができる。



図1. 東京駅直結のサピアタワーにて開催した学学連携による連続技術講座のチラシ

関西大学
東京センター
KANSAI UNIVERSITY TOKYO CENTER



写真1 開催会場のサピアタワー

H20年度(実績)
開催件数、1件

●統一テーマ 1件

H21年度(計画)
開催件数、2件

●統一テーマ 2件

成功の事例

聴講者参加型でプレゼンス向上

多くの大学や公設試などが産学官の連携を求めてセミナーなどの技術講座を開催しているが、これらの中には、多くの聴講者を求め、十分な討論時間を設けていないものも見受けられる。本技術セミナーでは、参加者との十分な討議時間を設けるなど明確な特徴を出すことで、他のセミナーとの違いを際立たせた。

●社会的に関心の高いテーマの選定と情報発信

日本は都市部への人口集中が大きく、高齢化にせよ温暖化にせよ課題が世界に先んじて現れる課題先進国である。これらの課題を解決するために産学連携が盛んになっているが、必ずしも一大学のみでは課題に対応できない場合が増えた。大学が連携することで、異なった角度から課題を捉え、有益な情報を発信する。

●参加企業との間で十分なディスカッション時間を取り、共同研究を目指す

講師による一方的な講演ではなく、参加企業の技術者と十分な討議の時間を持つことでお互いに深い議論が出来て、技術相談や共同研究などにつながる。

●首都圏におけるプレゼンスの向上

首都圏では多くの大学が在るので、関西の大学の存在感は希薄である。東京駅直結のサピアタワーという地の利も生かし、社会が求める課題解決型のセミナーを両大学が連携して実施することで、首都圏でのプレゼンスを高める。

失敗の事例

討議時間の確保とテーマの選定に課題

●初回のセミナーは討議時間が不十分

平成20年12月“視覚、眼球運動、感性、認知”などのキーワードのもとに、第1回目の学学連携セミナーを開催し約20社の参加企業を得たが、当初計画と異なり十分な討議時間を取る事が出来なかった。次回からは、2大学の講演時間と討議時間は全体の各々1/3である40分に変更して十分な討議時間を確保する。

●講演テーマの選択に工夫を要した

社会的に関心を持つテーマを設定し、異なった角度から課題を捉える工夫及び両大学とも専門の研究者による課題の提供が必要なので、教員の選定も含めテーマの選定に工夫を要した。

●質問の数が少なく、ひやりとした

参加企業こそ約20社の参加を得たが、十分な討議時間を取っていなかったせいもあり、質疑応答の時間に参加者からの挙手が少なくひやりとした。司会者から、参加者への問いかけをするなど、次回からは第1回目の反省点を活かす。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

もっと他機関とのネットワークの拡大を

関西大学と関西学院大学は、コーディネーター間や事務職員間に以前からつながりがあったが、両大学それぞれが東京オフィスを同一ビルの9階と10階のフロアに設けたことを契機として、首都圏におけるお互いのプレゼンスを高めるために学学連携の技術セミナーを共同で開催し始めた。

●連携による効果を出そう

これからの産学官連携を実りあるものにするには、1大学だけでの対応には限界がある。他大学との連携をはじめ、文部科学省産学官連携コーディネーターなどのネットワークも活用して、環境負荷の低減など現実の課題に対応する必要がある。

●首都圏におけるプレゼンスの向上を

関西大学も関西学院大学も関西においては高い知名度を持つが、首都圏においてはまだ十分な知名度を持ちえていない。関西の大学として関西圏の企業を元気にすることは重要であるが、今後は首都圏の企業にも活用とネットワークの拡大を図る。

新たなる 連携へ



写真2 学学連携セミナー
会場の様子

成功と失敗の 分かれ道

学学連携技術講座のように共同で事業を開催する場合、担当するコーディネーター・事務職員が本音で語り合える基盤をつくることである。

☆コーディネーターの一言

関西大学も関西学院大学も関西では良く知られているが、首都圏での存在感は十分ではない。大学の持つ優れた研究成果を首都圏の企業にも活用してもらう努力をする。